時評

高山　靖子

地域観光「模倣の罠」

「動かせぬ資源」耕す一歩を

二十四節気の雨水。今年は2月19日だそうだ。雪が雨に変わり、氷が解けて水になる頃。河津桜も春の訪れを知らせてくれている。県内では河津町や南伊豆町が有名だが、近年はインバウンドの増加により、一層のにぎわいを見せているという。

筆者は仕事柄、地域の観光資源発掘に関する話題に触れることが多い。そのたびに「模倣の罠」について考えを巡らせる。どこかの成功事例は気になるところだが、他所で再現可能なものは、わざわざその土地を訪れる意味を希薄にさせるからだ。それぞれの土地の風土や、長い歳月をかけて積み上げられた歴史、人々の営みの堆積の上に創られる「動かせないもの」こそが、その土地特有の代替不能な価値となる。後発がその時間を埋めるには、同じだけの年月をかけるか、より多くの人がその営みを生活に定着させなくてはならない。いずれにせよ、あらゆる伝統には必ず、「最初の一歩」がある。

トルコ共和国の「チャイダンルック」という二段式ポットで煮出した紅茶「チャイ」は同国独自の文化として知られるが、実はその歴史は百年に満たない。しかし、国家の後押しによる茶葉生産の普及や受け入れやすい価格とともに人々に愛され、独自の文化として瞬く間に定着した。その起源とされるロシアの「サモワール」という湯沸かし器で淹れる紅茶に引けを取らない、同国を象徴する独自の観光資源となっている。

以前、下田市でオリーブの苗を配布している様子を目にした。単なる商業的な栽培の推奨ではなく、利用方法などの情報とともに各家庭へ届け、市民自らが食卓などを通じて新たな文化を醸成する取り組みであったと記憶している。これもまた、未来の「動かせない資源」を創る挑戦だ。人々に受け入れられ、愛着を生み、そして何より続けられるもの。それが、いつしか時を経て、その土地固有の文化となる。

地域の観光や産業を考える際、即効性のある模倣可能な手法に飛びつくのではなく、勇気を持ち、数十年後に「その土地らしさ」と呼ばれるような、新たな文化の種を蒔く視点も持ちたい。人々の営みの積み重ねが愛着を育み、やがてその場所の風景となる。目に見える即物的な価値を追いかけるのではなく、雨水の訪れとともに土を耕し、作物を育てるように、歳月が生み出す「時間という厚み」を組み込むことが、その土地を訪れる価値を創る道であると考える。

（静岡文化芸術大デザイン学部教授）

たかやま・やすこ　1966年、愛知県生まれ。同県立芸術大美術学部卒。東芝デザインセンター、同大非常勤講師などを経て2007年に静岡文化芸術大着任、15年から現職。専門はプロダクトデザイン、デザインマネジメント。芸術工学博士。

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます